

図書館の書棚の中から ～気仙沼を訪ねて

仙台市民図書館長
村上 佳子



東日本大震災から、はや5年が過ぎました。

私は昨年4月、せんだいメディアテーク内の市民図書館に異動となり、様々な本とそれをご利用くださる方々と接しながら毎日を過ごしています。市民図書館では、「3・11震災文庫」として、東日本大震災に関する多岐にわたる資料を収集していますが、今回はそのなかから、気仙沼を舞台とする文学作品を紹介してみたいと思います。

仙台市在住の作家・熊谷達也が、2013年4月から320回にわたり河北新報に連載し、昨年7月に出版された『潮の音、空の青、海の詩』です。作者はかつて気仙沼市で中学校の教師をしていたことがあり、作品の背景にはその経験が生かされています。気仙沼市は、作中では仙河海（せんがうみ）市として登場します。



熊谷達也『潮の音、空の青、海の詩』NHK出版

物語は、2011年3月11日、仙台で予備校の講師をしている主人公・聡太が、大地震に遭遇するところから始まります。仙河海市から東京に進学し、最先端の技術者として活躍していたものの、会社が傾き職を失い、故郷に近い仙台に戻ってきているという設定です。震災後の混乱のなかで、何とかガソリンを入れた聡太は、故郷の仙河海市に車を走らせ、音信不通の両親を探して奔走します。

物語は三部構成で、第一部の「潮の音」は、震災発生から3週間、仙台と仙河海

を何度も往復した聡太がかつての同級生やその家族と出会い、行方不明の両親の死亡届けを出すところで終わります。第三部「海の詩」は、仙河海市に戻ってきた聡太がタクシードライバーとして働きながら、母を亡くした女友だちをはじめ中学校の同級生たちと関わりながら故郷で暮らし、やがて震災後のまちづくりの仲間にも加わっていく様子が描かれています。

その間には生まれた第二部「空の青」は、ちょっと不思議な近未来の物語です。主人公は小学校3年生の少年・呼人（よひと）、その父親は、東京オリンピックの年に生まれたという設定です。2020年開催のオリンピックです。高い防潮堤に囲まれた仙河海市で暮らす子どもたちは、小学校3年生まで海を見ることはありません。3年生の遠足で、先生に引率されて初めて防潮堤に登るのです。子どもたちは皆、「エニーさん」という子育てコンシェルジュがインストールされたクラウドノートを持ち、そこから年齢に応じて必要なことを教わり、不必要なことは教えられずに育ちます。呼人が初めて見た海は、これまでディスプレイの中で「エニーさん」に見せてもらっていた海とは違い、本当に生きているようだと感じます。やがて呼人は一人で海を見に防潮堤に来るようになり、ある日不思議な老人に出会います。この老人はハイテクな技術をもち、「エニーさん」のGPS機能をスリープさせて呼人を自宅のある森に連れて行ってくれます。そこで呼人は防潮堤のない海という驚きの景色を目にするのです。物語が進むにつれ、この老人が第一部の主人公・聡太であることが分かってきますが、最後まで少しの謎が残り余韻を感じさせる作品です。

熊谷達也は理工系の大学の出身で、中学校ではたしか数学を教えていたと思います。震災後、かつて教鞭をとった気仙沼に何度も足を運び、まちの姿を間近に見続ける中で仙河海市の物語が生まれたとのこと。仙河海市を舞台とする作品はほかにも数冊あり、同じ人物たちが時代を前後しながら登場し、連続した物語のようにも読むこともできます。（『微睡の海』『リアスの子』『ティーンズ・エイジ・ロック』）

気仙沼には歌人・落合直文とのゆかりがあり、仙台文学館に勤務していた頃に何度か訪れました。江戸末期に気仙沼で生まれた直文は、歌人や国学者として明治期を駆け抜けるように活躍した文学者です。今では読まれることは稀ですが、文学館の開館展示をかざった一人です。気仙沼では郷土が生んだ偉人として今も大切にされ、生家の「煙雲閣」は豊かな庭園をたたえ、地域の名所のひとつとなっています。海岸に近いところに位置しますが高台になっていたため津波の被害は免れたとのこと、本当に幸いです。かつて直文ゆかりの方々にその庭を案内していただき、残された資料を託されたことが思い出されます。

短歌結社を創設し多くの歌人を世に送り出した直文は、近代詩歌のなかで「恋人」という言葉を初めて使った歌人として話題になることもありますので、その歌と「煙雲閣」の庭にある歌碑に刻まれた歌を紹介してみます。

「砂の上にわが恋人の名をかけば
波のよせきてかげもとどめず」
「おくところよろしきをえておきおけば
皆おもしろし庭の庭石」

昨年秋、友人を訪ねる機会があり気仙

沼の安波山を案内してもらいました。街のやや北部に位置する標高239メートルの山は、海の安全と大漁を願って名づけられたといわれます。『潮の音、空の青、海の詩』の中では「泰波山」という名で登場します。その山から海に向かう景色を眺め、震災で変わったものと変わらなかったものとしばし想いを馳せました。

山から降りて案内されたのは、さんま料理の齊吉商店。「ばっばの台所」と称する民家風の料理店で、名物の金のさんま（さんまの佃煮風）をはじめ、炙りさんまやなめろう等の料理を堪能させていただきました。店舗も工場も被災した齊吉商店は仮設店舗での営業でしたが、おばあちゃんが孫娘を助手にして作る料理は、優しくたくましい味がしました。



安波山からの風景



仮設店舗の齊吉商店